熊野石佛（大日尊）の人類学的一考察

酒井富藏

(1) 緒言。大分県豊後高田市、大字田染字熊野、田原山五つ峯の内方断崖面に刻まれた巨大な石仏が見られます。この石仏は仁聞の所作と伝えられています。向つて右に大日如来と推定されている如来像と、左に不動明王とが相竝んで並刻されています。共に半立像で、全身高（顱頂より現地盤迄）は六米八八糎（二丈二尺七寸）（酒井実測値）あります。小野玄妙博士は造像当初の尊像の丈量を推定すれば殆んど支那雲崗の石仏に擬すべく、南都の大仏建立と相竝んで特筆すべき大芸術であり、大日如来尊上の三種の種子曼荼羅が、台密、東密、何れにも属せざる所伝を示すと言う理由で、大体仁聞説を「事実に近いもの」（極東の三大芸術所收大分県熊野の大仏について）（大乘仏教芸術史の研究）として肯定しておられます。所が浜田耕作博士は豊後磨崖石仏の研究（京大考古学報第九冊）に於いて、密教渡来以前の古密教による造像説を排して、臼杵市深田附近に散在する石仏像の特徴―即ち密教以後の儀軌に合しない如来形の螺髪を有している点や、その大日如来像の印相が金剛界、胎蔵界の何れにも一致しない点を目して、寧ろ薬師如来の形像をあらわすものと認められ、種々の様式上の比較研究を遂げて、その造顕年代を略々平安時代の密教渡来当時に帰せられています。更に昭和二十九年九、十月にかけて、九大谷口助教授を中心とする石仏調査団は、大日尊を藤原時代から鎌倉初期と造顕年代を推定して調査を行いました。つまり此の石仏は学者に依り造顕年代に五、六百年間の相違が有り、また大日尊上の種子曼荼羅もはっきりと究明した人はありません。現在迄一種のスウインクス的存在となつています。（此の種子曼荼羅の調査報告は許せば次回に詳細なる発表を致したいと思つています。）

そこで私は石仏のイコノグラフイー（Iconography）等の問題はさて置き、石仏の人類学的考察に依り、体質に関する限り直観的に過ぎなかつたものに、数理的科学的考察を試みました。以下それに関して述べて見たいと思います。

(2) 体質的人類学的研究法の応用

仏像は人工的作品であつて、自然現象ではありません。従つて之を対象として夫れに自然科学的研究方法を応用する場合に

は、その応用範囲は固より作品に存する自然現象的要素にのみ限られるべきでありましよう。仏像が人体を模したものであるとすれば、それが写実的なる限りに於いて、生体計測法の如き精密なる自然科学的研究方法を用いて、仏像を研究する事は極めて合理的であると言わねばなりません。換言すれば少くとも仏像の面相、体型、姿勢の如き形態に関しては、之れを人体同様に取扱つて差支えないのみならず、かく仏像の形態を人体のそれとして研究する場合には、生体計測法の如き精密な科学的方法に拠るべきであることは亦敢えて論を俟たない所であります。而るに、従来仏像の研究は概して審美的立場からの美醜の批判のみに限定された感があります。此の方法は仏像相互間の面相、体型等の比較研究に対して殆んど価値を有しないものです。作品の表情によつてかく美術的価値の判断をなす場合にも、面相や体型の数値は極めて重大な意義を持ちます。なんとなれば彫刻の表情の如きは、夫れの形態の各部分の量的比例の綜合にほかならないからであります。此の場合もとより直観的観察も必要でありますが、客観的に形態各部の量的比例について数学的観察を試みる事も亦同時に必要であります。仏像が他の装飾作品と異る所は、夫れが人体をモデルとした点であります。従つて仏像には他の彫刻の場合と同じく美的表現の外に性的表現や人類体質的表現の如き特殊の要素が存在致します。此の故に実測による数値の人類学的観察が当然に必要となります。換言すれば本研究は生体計測法を用いて仏像観察の基礎を数量的に正確ならしめた事、又人類体質学的若しくは人類体質学の立場よりして、仏像研究に科学的意義を求めたことであります。（坂村直規石崎達二共著「古代仏像の人類学的研究」）

(イ)、計測法。仏像は仏、菩薩を形体的に具現したものとはいえ、その外形では言う迄も無く実在の人体を模したものであります。従つてその計測用器として、マルチン式人体計測器を使用しました。

(ロ)、計測値及び示数。図示しました。

(ハ)、示数の意義。仏像には種々あります。等身大写実的彫像は少いものです。従つて全身高以下の各部位の計測値は、その絶対値に於いては寧ろ価値に乏しく、各部位間の比例、即ち体型の均衡の模様を看る時始めて有意義となります。

(二)、計　測　の　説　明

頭部全高＝顱頂より顎突に至る投射距離。
顔　高＝正中線にて前額被髪部より頤尖に至る投射直線距離。
顔　幅＝左右両顴骨弓の最外側に位する標点間の直線距離。
眼裂　高＝内眦と外眦とを連ねる眼裂方向線に直角をなす上眼瞼と眼瞼間の最大直線距離。
眼裂　幅＝内眦端と外眦端の直線距離。
鼻　高＝両内眦間直線と正中線との交叉点より鼻の中隔の基部に至る投射距離。
鼻　幅＝両鼻翼間の直線距離。
鼻　深＝鼻中隔と上唇部との界角より鼻尖に至る投射距離。
唇　紅　高＝上、下とも正中線に於けるその高さを以って示す。
口　裂　幅＝左、右口角間の直線距離。
鼻　根　深＝両内眦間直線上にある鼻背より鼻底に至る直線投射距離。
相貌的顔面示数＝顔幅一〇〇に対する顔高の割合。
眼裂高幅示数＝眼裂幅一〇〇に対する眼裂高の割合。
鼻形示数＝鼻高一〇〇に対する鼻幅の割合。
鼻幅深示数＝鼻幅一〇〇に対する鼻深の割合。
唇紅部高幅示数＝口裂幅一〇〇に対する唇紅全高の割合。
唇紅上下比＝下唇紅の高さ一〇〇に対する上唇紅の高さの割合。
内眦間比幅・眼裂比幅・鼻比幅・口裂比幅＝相貌的顔面高一〇〇に対する内眦間幅・眼裂幅・鼻幅・口裂幅のそれぞれの割合。
鼻根鼻深比＝鼻深一〇〇に対する鼻根深の割合。
眼相示数＝相貌的顔面示数一〇〇に対する眼裂高幅示数の割合。
口相示数＝相貌的顔面示数一〇〇に対する唇紅部高幅示数の割合。
鼻相示数＝相貌的顔面示数と鼻形示数との乗積を一〇〇にて除せる商値。
下顎示数＝顔幅（頬骨弓幅）一〇〇に対する下顎角幅の割合。

番号	測定部位	酒井数値	番号	測定部位及び示数	酒井数値
1	頭部全高	263.5（糎）	25	鬘髪の幅	約 14（糎）
2	相貌的顔高	160	26	三道間の幅（Ⅰ）	約 11
3	顔幅	135	27	三道間の幅（Ⅱ）	約 14
4	眼裂高	6.5	28	三道間の幅（Ⅲ）	約 18
5	眼裂幅	56	29	白毫の直径	8.8
6	鼻高	43	30	頭頂～肉髻の高さ	49
7	鼻幅	44.2	31	肉髻～被髪部の高さ	54.5
8	鼻深	15	32	螺髪の数（不明5個）	161（個）
9	唇紅高	12.9	33	相貌的顔面示数	118
10	口裂幅	45	34	眼裂高幅示数	11.6
11	上唇紅高	6.7	35	鼻形示数	102
12	下唇紅高	6.2	36	鼻幅深示数	33.9
13	内眦間幅	30.2	37	唇紅部高幅示数	28.7
14	鼻根深	11	38	唇紅上下比	108.1
15	下顎角幅	117	39	内眦間比幅	18.8
16	容貌学的耳長	162	40	眼裂比幅	35
17	容貌学的耳幅	36	41	鼻比幅	27.6
18	眉の長さ（直線）	67	42	口裂比幅	28.1
19	眉の長さ（曲線）	82	43	鼻根鼻深比	73.3
20	眉と上眼裂の長さ	33	44	眼相示数	9.8
21	鬢の長さ	44	45	鼻相示数	120.3
22	肉髻の高さ	約 11	46	口相示数	24.3
23	肉髻の幅	約 14	47	下顎示数	73.1
24	螺髪の高さ	約 11			

(3)　美術史に於けるわが造像様式の発展

本邦古代の彫像はわが大和民族の文化的所産として、世界に誇るにたるものであります。此の民族的至宝とも言うべき彫像の出現を可能ならしめたのは言う迄も無く仏教文化であります。仏教の公伝以来、飛鳥時代、白鳳時代、天平時代、平安初期（弘仁時代）、平安時代、鎌倉時代と変遷するに従つて、美術史上にも、造像様式の変遷発展が見られました。こゝに紙数の関係で時代的特徴を略しますが、ごく平易に大観しますと次の様です。例えば子は父の業よりも祖父の仕事を喜び、孫は子の仕事より父の業に進むと言うが如く、仏像彫像に於いても、剛直の次に温和となり、次に剛健となり亦優美に移ると言う様に一時代を置いて相似た傾向を取つて進む様です。即ち飛鳥時代は黎明の特殊時代として措き、奇数番に当れる白鳳、弘仁、鎌倉、徳川は「強」の意味に於いて手をつなき、偶数順の天平、藤原、足利は「優」に於いて相似しています。実際には弘仁と鎌倉には、共通点があり、藤原と足利とは、その鑑別上頗る難しい諸点を有しています（西田正秋著美術解剖学論攷）。かくの如く従来の仏像の研究は、概して直解的、審美的立場から美醜の批判のみに限定された感があります。

(4)　考　按

表現の手法として、写実的なる要素と然らざる要素とが概ね二つ乍ら存在しています。そのうち写実的なる要素について言えば、写実の対象たるモデルの如何によつて、表現様式に自ら差異を生じます。ガンダラ仏像は頗る写実的であるが、それは当時ガンダラ地方を占めていたゲルマン系種族をモデルとしたものであり、従つてガンダラ仏像はその様相に於いて同一種族たるゲルマン人の手になる希臘彫像と多大の類似点をもつことは当然の事であります。本邦の仏像はすべて此のガンダラ仏像に表現されたゲルマン系種族の人種的特徴を帯びる事は勿論でありますが、わが古代仏像には邦人の人種的特徴も亦多分に加味されているのであります。一般に仏像の顔面輪廓は概して、隋円形、円形、方形に属するもの多く、三角形に属するものは皆無であります。

さて此の大日如来像を体質的に見ますと、相貌的顔面示数が一一八で頗る長く長顔型です。示数からでは支那南北朝時代の

像と同形ですから支那の様式を模したものと考えられます。実際直観的には幽玄深遠の相を呈し、恰も密教思想そのまゝを具現した感じがします。又、此の大日尊は他の仏像に比し稍々頬骨弓が出つ張っています。これも東洋人の人種的特徴及び邦人の特徴をも加味したものと思われます。眼裂高幅示数は小であることは眼裂の開きが小さいと言う事ですから、その表情は瞑想的で森厳であります。これは東洋人の人種的特徴であります。年代が降ると共に仏像に此の人種的特徴が加味されたものと考える事が出来ます。鼻梁の低い事、鼻尖が鈍円なる事、顔面が割合に平板的である事等は邦人の人種体質的特徴を加味していると思われます。鼻梁の倒面輪廓（プロフイール）に於ける所謂鼻梁線は概して直線的であります。人体では直線状（ギリシヤ鼻）、凸状（鷲鼻）、凹状、波状（駱駝鼻、S字鼻）などの別があります。邦人では個人差が尠く概して直線状です。俗に言う鼻の高さ、すなわち顔面よりの鼻の隆起の度は鼻幅深示数によつて数量的に表わすことが出来ます。鼻幅深示数三三、九はホウオルカの分類によれば示数四二未満の隆起鼻に属します。即ち鼻幅が特に広い為に示数としては小さい数値を生ずるに至つたのでありますが、この現象は仏像が主として前面のみより拝するものである為に顔面の表現が特に平面化され、鼻の隆起の如きは故らに省略されるに至つた結果でありましよう。前面から見た鼻の形は鼻形示数によつて数量的に表わすことが出来ますが、こゝのは鼻形示数は一〇〇内外で広鼻形乃至過広鼻形に属します。この表現は仏像の鼻幅が人体の実際値より大きい事が知られ、仏像が写実の域を脱している事を意味します。然し幼児の鼻は人種の如何を問わず概ね広鼻形に属しますから、幼児にも見まほしき清浄無垢にして寛裕な相貌を賦与する為に頗る効果あらしめたものとも見られます。口部に於いては口裂線は飛鳥、白鳳の仏像では下弯し稍々微笑の表情を示していますが、天平期では水平に近く、平安初期では上彎して苦渋の表情を示していますが、此の大日尊は稍々上弯しています。面相を数量的に観察するには、眼相示数、鼻形示数、口相示数の数値で現わします。眼相示数は顔形と眼の開きとの関係。口相示数は顔形と口唇の厚さとの関係。鼻相示数は顔形と鼻幅との関係を主として示したものでありますが、これらの指数は時代色をあまり現わしてないようです。軀幹は風化作用により一見人工を加えていない様に見えます。測定は省略しました。（此の項 Ludolf Martin : Lehrbuch der Anthoropologie 及び金

関丈夫著日本人の人種学及び古代仏像の人類学的研究参照）

(5)　総括　測定値及び示数に依り時代的特徴を見ましたが、此の大日如来は長顔形である事は飛鳥期の仏像に似ています（飛鳥期以後は円形又は方形顔となります）。眼裂の開きの小さい点及び口裂線が上彎している点は天平期以後のものの様です。上唇紅高が下唇紅高より大きい事はこれも天平期以後の様です。顔面が森厳幽晦の相を呈している点は密教時代の仏像を思わせられます。これら時代的要素から考えますと儀軌に合わない判断に苦しむ所がありますが、天平期から平安初期の作品のものゝように思われます。しかしこれのみにては何等大日如来の時代的判定の決め手とはなるまいが、（大日尊上の種子曼荼羅、その他の製作年代も考慮に入れねばならないから）、しかし何等かの参考資料にはなりましよう。、更に此の大日尊には次に述べる種々なる要因をも含んでいます。

(イ)　果して此の熊野石仏が大和朝廷の文化圏勢力圏内になる造顕であるかどうか。（拙著「豊後高田を中心とせる歴史地理学的研究」、及び川勝政太郎著「日本の石仏」、及び西村貞著「奈良の石仏」）

(ロ)　大日尊上の三種の種子曼荼羅を未だ読んだ人がない。即ちわからない。（小野玄妙博士及び九大干潟教授等による）

(ハ)　仁聞なる人物が実在か伝説であるか、それを確証する資料がない。（拙著「富貴寺」）

(ニ)　奈良時代に宇佐八幡を中心とする文化勢力圏が出来ていて、大和朝廷をも凌ぐ勢力を有していた事。（拙著「富貴寺」）

(ホ)　仏教公伝は印度、支那、朝鮮更に九州を経て大和に伝わつた事、即ち九州が渡来僧の足場となつた事、渡来僧の作であるかどうか。（拙著「豊後高田を中心とせる歴史地理学的研究」）

(ヘ)　大分の石仏群は、県内各地方に依り各々その石彫の様式や手法を異にしている事。（小野玄妙著「大乗仏教芸術史の研究」、及び浜田耕作著「豊後磨崖石仏の研究」）

(ト)　切支丹宗門を奉じた大友宗麟と其の一派の排仏棄釈は相当徹底的に行われた事（九州版元禄記）。従つて他地方に比して史実を確証するだけの古文書がない事。

(チ)　此の石仏の人類学的比較考察する文献が無いといつてよい事等であります。

（県立高田高校教諭）